



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会教育的ケアの構想
Author(s)	大津, 恵実; 澁江, 孟; 本間, 康子 他
Citation	社会教育研究, 38, 49-67
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80492
Type	departmental bulletin paper
File Information	006-0913-0373-38.pdf



社会教育的ケアの構想

大津 恵実・澁江 孟・本間 康子
春原 昭弘・劉 錦・木村 雅一¹

目 次

1. 問題の所在	50
1-1. 現代社会に浸透する競争的・排除的な人間関係	50
1-2. ケア論の研究動向	50
2. 現前性と贈与論から見るケアの相互承認関係	51
2-1. 現前性を本質としたアーサー・クラインマンのケア論	51
2-2. 贈与と分かち合い	52
3. 社会教育的ケアの構想	53
4. ココルームという「場」づくりの解明	55
4-1. 「表現者」として「立ち会う」上田さんの「立ち方」	55
4-2. ココルームという「場」	58
4-3. 釜ヶ崎芸術大学という「場」	59
4-4. 小括	60
5. 井戸掘り実践で起こった物語・経験の交換	61
5-1. おじさんたちの記憶・経験が表現される場づくり	61
5-2. おじさんと参加者の関係性の変容	62
5-3. 井戸掘りの楽しさ	62
5-4. 井戸掘りを通じた上田さんの変化	64
5-5. 小括：井戸掘りがもたらしたもの	65
6. まとめにかえて	65

¹ 問題意識などはこのメンバーでの議論をもとに絞り込んでいった。執筆の分担は以下の通りである。1.大津、2-1.大津、2-2.澁江、3.大津、4.本間、5.澁江

1. 問題の所在

1-1. 現代社会に浸透する競争的・排除的な人間関係

近年地域の様々な領域で排除の問題が生じており、またそのような人々を支援する役割が社会教育にも求められている。新自由主義にもとづき自由競争の推進による効率性や生産性を優先した結果、競争的価値観が地域社会に浸透していった。地域社会の中でも競争を迫られ、自分たちがどのような生活をしたいか、人が生きる上で何が大切かをじっくり話し合う関係、機会、時間を保持することが困難になっている。このような状況の中では、競争に勝つ強い自分であることが求められるため、その競争からこぼれ落ちたり、その中でもがき苦しむ人たちは、自分で自分を保つことが難しく、自分や他者への信頼を喪失し、自分のリスクを増大させる他者を排除することで、自己を安定化させていかなければならない状況が強まっている²。このような今日の他者を排除する自己形成をいかに克服することができるだろうか。また、自己並びに排除された他者の回復はいかに可能か。克服する方法があるのであれば、それをいかに地域生活の中に根付かせることができるだろうか。

このような人間の排除的な関係性を捉え直し、相互依存的な関係性を基盤に置くのがケア論であり、医療・福祉の分野に限らず近年は様々な領域で注目されている。社会教育は自己教育・相互教育が本質としてあり、住民の自主的参加が前提となっているため、比較的競争的・排除的な関係性が浸透しにくかったのか、社会教育研究とケア論を結び付けた研究はあまり見られない。しかし、地域における競争的・排除的な関係性が人びとの生きづらさを増大させているとすれば、地域の中にケアを成り立たせるコミュニティのあり方を論じることが社会教育研究にとって必要であると考えられる。したがって、本稿では社会教育的ケアの構想という観点から競争的・排除的な関係性を乗り越える方法を検討してみたい。

1-2. ケア論の研究動向

まず教育学研究におけるケア論の先行研究を確認しておく。

中野は、教師の子どもに対するケアリングを「教育学的ケアリング」、子どものケアリング能力を育成していくことを「ケアリング教育」、またケアリング教育のために教師がなにを行うかという問題を「教育的ケアリング」と概念区分して、ケアリングを重層的にとらえる。ケアする人とケアされる人との関係を解き明かすことは、ケアリング論の第一の課題となっている³。中野が捉えるケア関係は教師と生徒の二者関係であり、教師は生徒のケアリング能力を育成する存在として位置付けられ

² 宮崎隆志「自己形成の基盤をみんなでつくる：『つきさつぷプロジェクト』の経験から」『教育』870号、2018年7月、pp.79-86。

³ 中野啓明、伊藤博美、立山善康編著『ケアリングの現在：倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて』晃洋書房、2006年、p.204。

ている。

一方、教師と生徒の二者関係に留まらず、学級集団づくりにおけるケアを論じたのが竹内⁴である。竹内ら生活指導の領域では、同年齢集団である学級でのケア共同体の構築という視点で関わる教師の指導の在り方を提示している。

では、学校以外の日常生活における関係性の問い直しに関する議論にはどのようなものがあるのか。近年注目されているのは、地域福祉の領域で行われているコミュニティケアやケアリング・コミュニティの議論⁵である。地域でケア関係を生成するコミュニティの在り方を議論してはいるが、システムの構築という視点でケア関係の成立を見ており、個々の関係を含む場全体のあり方は検討俎上にあがっていない。

すなわち、学校教育研究におけるケア関係論も地域福祉研究におけるコミュニティケア論もケアをする主体とされる主体という固定的な図式で関係性を捉えている。生活指導研究においては、ケア共同体の構築という点で日常生活におけるケア関係が論じられているが、対象は生徒であり、学校という特殊な空間での日常生活が議論の前提になっている。

では、地域における日常的なケア関係の構築をどのようなものとして構想していけば良いのか。以下では、他者を必要とする自己、他者とともに在る自己という視点から、アーサー・クラインマンの議論を手掛かりに検討していく。

2. 現前性と贈与論から見るケアの相互承認関係

2-1. 現前性を本質としたアーサー・クラインマンのケア論

アメリカの精神科医のアーサー・クラインマンは、現代の医療、ケアシステムがコストや時間の効率性を求めるようになってきていると指摘しており、そのような状況に抗して医療従事者は人間を尊重し、人間とは何かという人間性に重きをおいて行動すべきであると呼びかけている⁶。クラインマンは「たとえもう治る希望もなく、為す術のない状況に陥っても、患者とともに在ること、その場とともに存在するという、現前性の体験がケアになるのである」⁷と述べており、ケアの本質を現前性に見ている。

ではなぜ現前性の体験がケアとなるのか。クラインマンはケア関係を贈与交換するような互惠関係と捉えている。

⁴ 竹内常一『ケアと自治 新・生活指導の理論：学びと参加』高文研、2016年

⁵ 日本地域福祉研究所監修、中島修・菱沼幹男共編『コミュニティソーシャルワークの理論と実践』中央法規、2015年

⁶ 皆藤章編・監訳、アーサー・クラインマン・江口重幸・皆藤章著『ケアをすることの意味：病む人とともに在ることの心理学と医療人類学』誠信書房、2015年、pp.48-49、p.96.

⁷ 同上、p.123.

ケアは、一種の贈与（ギフト）の交換をするようなものです。ケアをすることとして、患者はみずからの物語、つまり彼らの心配や恐れ、彼らのニーズを贈与し、そしてその贈与を受け取った人が患者を手助けし、ニーズに応えようとすることでギフトのお返しをしているのです⁸。

ケアとは、入浴させる、食事を与えるというような患者ができないこと、欲していることを一方的に援助する行為のみを指すのではなく、その過程でお互いの物語や経験を分かち合い、交換し合うような関係性なのである。さらに「そこでは、道徳的責任や情動的感性、関係という社会的資源が分かち合われることになる。それによってケアをする存在とケアを受ける側双方の主観性が変化する」⁹と述べられており、相互承認的な応答関係をケアと捉えている。

では、お互いの物語や経験を共有し、交換し合うようなケアはどのような場面で起こるのだろうか。「ケアをすることはほとんどの場合常にケアをする側と患う側の双方が、お互いに深く交流してその関係を生きるなかで行なわれる実践」¹⁰であり、「両者は生きるということや自己について、そして人間の尊厳に関わって生じてくる、ここを占めるもっとも困難な事態に共鳴し、呼応する」¹¹。この点から考えると、排除的な人間関係に抗するケア関係が地域に派生、循環するためには、お互いにとって困難な事態に深く交流することが条件となるであろう。

また、クラインマンは患者から表現される文化についても言及している。

文化はモノではなくむしろプロセスです。文化とは、誰かと語り合ったり、食事をしたり、街を歩いたりといった日常的な暮らしにおけるプロセス、日常生活に集う人びとが感情を表現したり道徳的・人間的な意味を醸し出す暮らしを通したプロセス、それが文化であると理解した方がより有用でしょう¹²。

すなわち、「ともに在る」ケアにおいて、経験や物語が表現される過程は文化と捉えることができる。このように考えると、援助、治療という行為・関係に限定せず、地域における日常的な活動においても、お互いの物語・経験が深く共有される機会があれば、ケア関係を築くことができるだろう。

2-2. 贈与と分かち合い

クラインマンはケアを人間同士の「贈与交換」「分かち合い」というキーワードで論じていた。マルセル・モースは、これらは人間本来もっていた慣習であったが、今現在になってそれらの在り方は

⁸ 同上、p.105.

⁹ 同上、pp.151-152.

¹⁰ 同上、p.151.

¹¹ 同上、p.151.

¹² 同上、p.126.

大きく変わったと指摘する¹³。モースは、贈与を義務的に①提供され、②受容され、③返礼される集団的な「互酬性」であることを見出し、人間の「気前のよさ」から生ずる行為と捉えている。この贈与交換の中で、贈る側と受け取る側は、争わずして、私的利益から集団全体の利益へ向かうことを大切にしている。つまり、モースの贈与論では、人間は気前よく物を与える贈与関係や信頼関係を保持しており、いかに争いを起こさずに安全に平和に暮らせるかという人間存在のあり方を捉え返す視点を含んでいる。しかし、利益の獲得を優先する資本主義の発展により、人間の気前のよさが消失し、商取引から人間関係を見えなくさせている。モースの贈与論は現代社会で見失われた贈与の風習の重要性を指摘している。

また、エンゲルスは、原始社会では、すべての人は1つの共同体を単位として暮らしていたことを指摘した¹⁴。当時の家族形態は氏族の発生を特徴とし、血縁関係の繋がりの中で、大きな共同体（大家族）を形成しており、自分の子ではない子も一様に共同体の子として扶助すべき対象であった。そこには、「公共の福祉」が無意識のうちに根付いていたのである。そして、すべての生産、取得は共同で行われていたことから、人間は共同体の中でそれらを分かち合っていたことが分かる。

しかし、現代において、大きな共同体であった家族が分散し、知り合い以外の人と分かち合うことが難しくなっている。このような人が気前良く贈与交換し、共同体の中で分かち合うような人間本来の関係性をどのように取り戻すことができるのだろうか。

3. 社会教育的ケアの構想

私たちの問題意識は、ケアの専門化のあり方にとどまらず、私たちが生きる地域社会において、日常的に人間存在を承認し合うような多様な関係性をどのように取り結ぶことができるのかということである。

クラインマンは、ケアが「家族や親しい友人、社会的ネットワークや小さなコミュニティのなかで行なわれている」¹⁵とも述べており、歴史的にも家族や地域の中で自然に営まれていたケアの関係性を医療従事者と患者との関係性に導入しようとしている。しかし、地域における様々な排除、孤立、暴力に関する問題が社会的にも注目されているように、地域においても「ともに在る」こと、ケアという相互承認関係を築くことが難しくなっている。したがって、地域における日常的なケア関係を取り戻す方法を考える必要がある。

では、なぜ今地域の中でケア関係を築くことが難しいのだろうか。クラインマンは治療行為における医者と患者のケア関係を論じていた。特に精神病患者が自らの病いの経験を語り、医者がそれを聞

¹³ マルセル・モース著、吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、2009年

¹⁴ エンゲルス著、戸原二郎訳『家族・私有財産・国家の起源』（岩波文庫）岩波書店、1965年

¹⁵ アーサー・クラインマン、前掲書、p.124.

くという過程において、患者の困難な状況を分かち合うという交流が想定されている。しかし、日常生活において、自分の困難や経験を語るような場面は少ない。また、地域の中での排除・孤立という問題を考えると、そもそも地域の中で多様な経験を持つ人たち、多様な属性の人たちが同じ時間・空間を共有することが少ないと言えるだろう。また、何らかのきっかけがあって、多様な経験を持つ人たちが時間・空間を共有することがあるとしても、そこから対話的な関係を築くことは難しい。すなわち、現代社会において、お互いの経験や物語を表現し、交換し合い、「ともに在る」ことは容易ではない。時間・空間を共有すれば、何かしらの応答関係が生まれるが、それをお互いに意味あるものとして交換できるようになるためには、何らかの仕掛けが必要となるのではないだろうか。

ここで宮崎の視点を参照したい。宮崎は、協働活動における共同蓄積の過程において、ケアの思想が生み出される可能性を指摘している¹⁶。人間は「依存する主体であり、他者を必要とする主体」¹⁷であり、他者との関わりの中で形成される自己という捉え方を前提としている。すなわち、地域で日常的に人間存在を承認し合うようなケア関係とは、宮崎が指摘したように、「病や障害に対するものに限定されずに、差異ある他者に対する関心と配慮、つまり放置できないという情動に起因する活動」¹⁸に内包されるものである。

以上より、地域における日常的な相互承認関係を取り戻すために、「ともに在る」ことができる方法・仕掛けを明らかにすることを本稿の目的とする。この協働活動を通して「ともに在る」ことができる相互承認的な関係性を生成する方法を社会教育的ケアと措定する。その関係性はコミュニティ（地域）において、日常的なコンフリクトを乗り越える過程で、深い交流が生まれ、お互いの物語や経験を共有し合うことによって成立する。

この社会教育的ケアという方法を検討するために、本稿では大阪の釜ヶ崎で「表現」をキーワードに取り組みを進めているアート NPO 釜ヶ崎ココローム¹⁹（以下ココローム）の実践より以下の二点を考察する。

一点目はケア関係を生成する場づくりの解明である。ケア関係が生成する場はどのように作られるのか、実践に関わる支援者・援助者はどのような意識で、どのような働きかけをしているのか。社会教育に関わる専門職は、学習者との水平的な関係性の構築がその特徴として論じられてきた。治療を受ける者、教育される者、支援を受ける者といった受動的な他者ではなく、差異ある一般的他者としての関わりを築いていくことに相互承認関係の構築の機会があると考え。「ともに在る」ことのできる関係性が生成するとき、実践における教育者、援助者はどのように学習者に向き合うのか。

二点目は、活動を通じたケア関係の生成、経験・物語の共有交換の過程がどのように生じているの

¹⁶ 宮崎隆志「協働の経験が生み出す思想」『にじ：協同組合経営研究誌』668号、2019年、pp.68-75。

¹⁷ フェビエンヌ・ブルジェール著、原山哲・山下りえ訳『ケアの倫理：ネオリベラリズムへの反論』（文庫クセジュ）白水社、2014年、p.80。

¹⁸ 宮崎、前論文。

¹⁹ ココロームの概要は導入文の「2019年度 社会教育研究室大学院ゼミ活動報告」を参照されたい。

かという点である。宮崎の議論を参照すると生活と労働と学習を切り離さない協働の過程にこそ、その人の物語が最も表出され、深い交流が生まれ、ケア関係が築かれると考えられる。しかし、生活と労働の場が物理的に離れている現代において、そこに共通の活動が生じるためには何らかの仕掛けが必要となる。本稿では、その仕掛けをココルームでの表現活動を手がかりに描き出す。協働の過程において「ともに在る」とはどのような関係性なのか、ココルームの活動の中で参加者の物語が最も表現された「井戸掘り」の実践を取り上げ、読み解いていく。協働の経験においては、コンフリクトを共有し、乗り越えていく過程が重要となる。コミュニティにおいて日常的なコンフリクトを経て関係性の深まりが起きるのは、そこにケア関係が成立しているからであろう。

以上二点の考察から、社会教育的ケアのという方法を検討していく。

4. ココルームという「場」づくりの解明

ココルームはアート・表現の活動をしている団体であり、課題や困難を抱えた人のための支援機関ではない。しかし、ココルーム代表の上田さんの実践記録を読んだり、実際にお話を伺ったりする中で、ココルームでは確かに多様なケア関係が生まれていると感じた。本章では、ココルームというケア関係を生成・派生させていく場がどのようにつくられ、そこでどのような関係性が生まれているのかを研究会記録及び『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム』に収められた上田さんの文章より考察する。

4-1. 「表現者」として「立ち会う」上田さんの「立ち方」

2019 年 11 月のココルーム研究会で上田さんが次のように述べた言葉が、ココルームという「場づくり」の基本姿勢を現しているように思う。

立ち会ってると意識。ただそれだけ。ただそれだけなので、その人が自ら表現されるということがされたらいいし、私は立ち会いながら、私も何かを表現するであろうってこと²⁰

この言葉からは意図的に「能動性」「積極性」「計画性」などを極力そぎおとして「ただそこにいる」という状態を体現しているように思われる。このような上田さんの立ち方は、どのように体得されたのだろうか。

²⁰ 2019 年 11 月 28 日に行った、ココルーム代表上田氏、当事者伊藤氏との研究会記録より。以降「研究会記録」と記載する。

「世界に見つけられる」体験

「多感で生きづらかった思春期、自意識のコントロールは吉野の自然と家族の愛情に助けられた」という上田さんには、17歳の時、その吉野の裏山で「声を見た」原体験がある。後年、自身の振る舞いが職場に不協和音をもたらしていた調理師時代、住み込みで働いていた温泉ホテルがあった吉野の山中で、カラカラと笑う星々に話しかけられた時に原体験が甦る。「無名のいのちが世界に見つけられて満たされた。このままでもいい。私にこだわらなくてもいい、がんばれる、と思った」²¹。「世界に見つけられた感じ」と名付けられたこの経験が、以降の上田さんの立ち方の根本になっていく。

詩を仕事にすると決めた上田さんが、「詩人の仕事って何かな？」と考えて、『命は小さくなったリ欠けたりしないし、ちゃんとあなたのところにあるよ』ということに、そっと光を当てるような仕方方で社会に関わっていくことじゃないかと」²²と、自答する。

上田さんがはじめたココルームには吉野の山の星空が広がっているのではなかろうか。

「自分にこだわらない」と「自らをひらいていく」

「命は小さくなったり欠けたりしない」...何者かにならなくていいし、他者の承認を必要とするものでもない...無名のいのちといのちが会おうところに表現が生まれる。

字が書けない安さんというおじいさんに会い、「人は安心した場所で、やっと素直に表現できるんだなと気づいた」²³ 上田さんは次のように述べている。

表現を担保するとは、お互いの存在を認め、大切にしている場を作れているかを問われているということなのだ。表現することが大事なのではなく、表現できる場をつくられているか、その場の一人として、他者として生きているか、と²⁴

詩業家を名乗りながら「表現することが大事なのではなく」と言う上田さんの「自分にこだわらない」立ち方が、「安心して表現できる場」づくりの核になっていることは間違いない。

そして、もうひとつ、「自分にこだわらない」と対になっていると思われるのが、「自らを開いていく」という言葉である。「ココルームで取り組んできたことは後から見ると『すごい』と言われるが、現場では毎日起こる出来事にひとつひとつ取り組んできただけのこと。この差を縮めるのがこの本の役割だと思っている。特別な能力を持つ人たちが取り組んできたわけではなく、ほがらかに、時間を信じ、しつこく、自らをひらくようにこころがけてきた積み重ねだから。」²⁵ という上田さんは、研

²¹ 上田假奈代『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム』フィルムアート社、2016年、p.46.

²² 同上、p.195.

²³ 同上、p.193.

²⁴ 同上、p.55.

²⁵ 同上、pp.8-9.

研究会のときも「ひらく」ということに言及している。また、活動の仲間である伊藤さんの「本当に足向けて寝られへん。恐れ多いですよ。いや、それが尊敬であって、承認って」という発言を受けて、次のように話していた。

でもそうされる私っていうのは、私が承認されてるってことじゃないですか。だから私は私にそう言ってくれ、そうやって言ってもらえる喜びっていうのに、日々ね、ありがたいなと。ただまあここですよ、やっぱりね、あの、そこに依存しちゃいけないと思っていて。本当に。そこをどうやってそこを風通し良くしていくかっていう。なんて言うか、開き方みたいなことはすごい気に、開こうと、気遣いますね²⁶。

「承認」に依存しない、あくまで無名のいのち同士としてその場にあるとする、そのことを「開く」と表現しているというふうに理解できる。伊藤さんが「表現した人も生きとるやん。俺も生きとるやんか。で、生きとる二人には、ちゃんと親がおったわけやんか。だからそういう存在であるってことは一緒やから、だからそれは否定するんじゃないしに、あの、認めるっていうか、難しいな。そういうのは、批判はできない、しない、っていう精神、気持ちが今。...今までやったらほとんど許せん人ばかりやったけど、釜ヶ崎きてからは、ほぼ許せるようになってきた」²⁷ と言っていたこととも重なる。

「働くことはいのちをつなぐこと」

「どうして働くのですかという質問に私は、ひとりで生きてゆけないからだと答える」²⁸。

「働く」ことや「仕事」についての上田さんの姿勢には「持ち場」という意識が大きくかかわっている。サラリーマンだった父を見て、父は家族のためにしたくない仕事をしているのではないかと思ったり、また自分も大人になって働くことに漠然とした不安を持っていた小学生の時、父が星の光の話をするのを聞いて、「生きてゆくことはいのちをつないでゆくこと。父が選んでいる人生を同情するなんてむしろ失礼なことでそれぞれの持ち場で一生懸命生きていることが大事なんやな」²⁹と思う。また、鬱病という診断に至らず自律神経失調症と言われた 20 代前半の頃、地下鉄で電車を待っていた時にハッとひらめく。「時間になったから電車がやってきたわけじゃない。線路をつくる人、材料をつくる人、働く人の服や食べ物をつくる人、運ぶ人、いろんな人が目の前にいない誰かのために働くから、今電車がやってきたのだと。その時、シナプスがつながり電気が走った。その世界に一ミリでもいいから、私も参加したい、と思ったのだ」³⁰。このような発見や気づきを経た上田さ

²⁶ 研究会記録より

²⁷ 同上

²⁸ 上田、前掲書、p.140.

²⁹ 同上、p.40.

³⁰ 同上、p.44.

んは「働きあう」と言う。「これまで一生懸命働いてきた人であれば、働くことを重労働だけではなく広くとらえるだろう。お金にならなくても仕事となることを知っていると思う…（中略）… 名も知らぬ誰かと関わりながら生きる。働きあっていると思えることが、生きることを支えている」³¹。

そして、「持ち場」「働きあう」と言うときに、おそらく上田さんは「負ってきたもの」をその視野に捉える。「負わされた」と言わず「負ってきた」と言うのは、「父が選んでいる人生を同情するなんてむしろ失礼」という思いと通底するものだろう。それは、倒れそうなほどアルミ缶を積んだ自転車、段ボールを乗せたリヤカー、荷物を持って歩き続ける人々に対しても同様である。「自己責任と言われる風潮がある。本当にそうだろうか。便利さと引き換えに失ったものがあるとしたら、それをどうやって補完していくのか。資本主義の次はどんな社会なのか。もしかしたら問いのヒントはこのまちにあるのではないか。資本主義に利用され、利用し、生きるしかなかった人間の匂いと鼻をつく消毒液の匂いの中で直感する」³²。かくして「高度経済成長を底辺で支えてきた人たちの話を聞きたい」「釜ヶ崎に生きる人たちの素朴な表現、声にならない声をもっと聴きたいと思うようにな」³³り、喫茶店のフリをした表現の場が釜ヶ崎という場所に開かれることになる。

4-2. ココルームという「場」

4-1 では「表現者」としての上田さんの立ち方がどのように体得されたのかを記述してきた。では、そのような上田さんの立ち方が体現されたココルームという「場」はどのような「場」なのか。

無名の存在、無名の人たちが無名の仲間と作り上げた無名の何か。名前もなく流れつづけてとりとめもないから生き生きとしている。窪みに澱が溜まるので少し押し出そうとするが、澱が栄養になることもわかってきたので少し残す。岸辺の際の、陸の領分か水の領分かわからないような際のあたりのあいまいなところに名も知らぬ草が茂り、葉を落とし、生き物たちが跳ねたり這ったりしている³⁴。

『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム』の「はじめに」の冒頭五行は、ココルームという「場」に注ぐ上田さんのまなざしのありようが、そのまま表現されているように思う。流れは時代もしくは時代を生きる人々、岸辺の際は釜ヶ崎、毎日起こる問題含みの出来事が澱だろうか。そして、そこに生きる生き物たちは飛ばない。跳ねたり這ったりしている。かつて吉野の山中でほほ笑んだ星々が上田さんの身体を通してまなざしているようだ。

³¹ 同上、p.140.

³² 同上、p.53.

³³ 同上、p.52.

³⁴ 同上、p.6.

「困難を生きてきた人にとって、表現は自分と世界との『出会い直し』なんですよ。そこに立ち会っていると、こころにグッとくるんです」³⁵ と話しているように、上田さんはおじさんたちの表現を信じている。「表現」が社会にどう関われるのかをさぐりたくて釜ヶ崎で活動してきたココルームが取り組んできたことは、再掲するが、「ほがらかに、時間を信じ、しつこく、自らをひらくようにこころがけてきた積み重ねだ」³⁶。

だが、人間はいつも自然にほがらかでいられない。上田さんを含め日常的に関わるココルームのスタッフとおじさんたちとの関係は厳しいところもあるという。おじさんたちがココルームの活動を誤解したり、問題をおこしたりするようなこともある。そこで釜ヶ崎芸術大学という取り組みはその場の雰囲気や関係性を変える活動になっている。そこで重要なのが「講師」の存在である。「プロが入った時にスッと風が通り抜け」、「そこで素敵なのが作り上げられて、それをみんなで喜んで楽しい時間があると、おじさんも変わるし、私たちも変わる、関係が変わる」³⁷ ことがあるという。「おじさんの側にも私たちにも変われる時間が必要」³⁸ なのである。

ここから、ココルームという場は上田さん含めスタッフとおじさんにとっては、日常になっていることが伺える。しかし、ゆっくり時間をかけて、お互いが認め合い、関係性を変化させていくために、非日常的な活動や外部の人の参加の場を意図的に作っていると言えるだろう。

4-3. 釜ヶ崎芸術大学という「場」

4-2 で紹介したような釜ヶ崎芸術大学（以下、釜芸）はココルームという場を拡大させた取り組みであると言える。そこで本節では釜芸の取り組みの特徴を述べていく。

元ココルームスタッフの植田さんは、釜芸を開校する前、釜ヶ崎の道ばたで、ふとすれ違うおじさんと言葉を交わしながら、「全ての人と出会うことはできないが、もう少し多くの人と出会いたい」³⁹ そう感じていたという。多くの人と出会うための工夫は、集中的な日程だったり、地域の中心部から行きやすい距離だったり、チラシの文字の大きさだったり、申し込みを要請しないことだったり、さまざまにこらされているが、なかでも、講師の選び方は釜芸ならではのものだろう。いわく、「どんな人生を前にしてもしっかり向き合ってくれる方、そして授業の行方がどこへゆこうとおもしろがってくれるであろう方」⁴⁰。しかし、こうした多くの人と出会うための工夫が、緊張をはらむ場面も生み出す。スタッフの植田さんは「たとえば参加者が、ほかの参加者の言動に感情的に言葉を返したり、講師に対し『望んでいたのはこんな授業ではない』と強く言うこともあった。出入り自由に

³⁵ 同上、p.210.

³⁶ 同上、p.8-9.

³⁷ 同上、p.192.

³⁸ 同上、p.197.

³⁹ 同上、p.166.

⁴⁰ 同上、p.168.

していたため、ばたばたと入退場も多く、なかにはふらっと来て講師の話は聞かず、自分の言いたいことだけを言って帰ってゆく人もいた。率直な意見があり、自由な参加の仕方があることがおもしろいと頭ではわかりつつ、場を用意している私は、やはりそのようなことがあるたびに少し緊張する」⁴¹ と言い、「場面に慣れていない」ことと「対応を試される」ことをその理由として挙げている。そして、「これまで私が通った学校という場ではすでに排除されていたことがどれほどあったのかを思い知った」⁴² という。「釜ヶ崎芸術大学は、あらかじめ想定されていないことがあっても、その日その場にそこにいる人たちを信頼する練習のようにも感じられた」⁴³ という植田さんの言葉を裏返せば学校から排除されていたのは、「自由な参加」であり、そこから派生する「想定外」であり、それを「おもしろがる態度」であり、それら全体を「信頼する」ことなのだろう。このように、「想定外」を参加者同士が面白がることのできる仕掛けがあるため、釜ヶ崎芸術大学はお互いに信頼する練習ができる「場」なのである。

4-4. 小括

本章ではケア関係が生成する場はどのように作られるのか、実践に関わる支援者・援助者はどのような意識で、どのような働きかけをしているのかという点を考察してきた。ケア関係を生成しているコッルームの「場」づくりの特徴は以下の三つである。一つ目は「自分にこだわらない」「自らをひらく」という上田さんの立ち方である。二つ目は、コッルームが日常的な場になっているからこそ、非日常的な活動を仕掛けていることである。新たな活動や外部の人がコッルームに出入りすることが刺激となり、日常のコッルームの場・関係性も変容していく。三つ目は、想定外を面白がることである。上田さん以外のスタッフも、想定外の状況やありのままのその人の表現を面白がる態度を、実感しながら身に着けていた。この態度が自由な参加を保障しており、信頼関係の構築につながっているのであろう。

コッルームは課題や困難を抱えた人の支援の場ではなく、表現できる場がその人が救われる場へ転換しているように思われる。すなわち、実質的な支援の場となっているのである。他者に関わる際に、その他者に対する期待や希望、願いが前面に出てしまうこともあり得る。しかし、上田さんは表現してほしいという願いはありつつも、その人を助けたり、こう変わってほしいというような思いで関わっているわけではない。その人のありのままの表現を受け止めるため「ただそばにいる」ということは、何もしないということではなく、自らひらいていく意図的な関わりである。意図的に自らをひらいていくということは、社会からの抑圧状況を内面化し、存在論的次元まで深く傷を負ったおじさんたちと向き合うことを可能にする。なぜなら、人は他者との出会いの中で、何らかの形で互いに侵し

⁴¹ 同上、p.170.

⁴² 同上

⁴³ 同上、p.171.

あう⁴⁴ が、上田さんが「自らをひらく」という立ち方は、おじさんたちの中で表現や存在への承認として立ち現れる。おじさんたちにとって上田さんは自分の表現を受け止めてくれる必要不可欠の存在であり、上田さんにとってもそうである。この相互応答関係が、他者の他者性を尊敬し、他者の他者性に限りなく接近し、他者の呼びかけに応答する⁴⁵ ことを可能にする。その中で応答の関係性を取り結ばれる時、応答される者の側に「私がここにいる」という存在の重みが感じられ、「私」という意識が当人の中に育まれ、「私」は自分自身の要求を意識することができるようになる⁴⁶。その過程において、自己と他者の間で信頼関係が生まれる。

おじさんたちが、「ココルームだったら」、あるいは「上田さんとだったら」、自分自身を表現できるのは、相互の信頼関係に基づいているからと言えるであろう。

5. 井戸掘りで起こった経験・物語の交換

本章では、ココルームで 2019 年度に行われた釜芸の井戸掘りの取り組みに焦点化し、協働活動を通じたケア関係の生成、経験・物語の共有交換の過程がどのように生じているのかを考察する。

5-1. おじさんたちの記憶・経験が表現される場づくり

釜芸の目的の一つは、講師を務めるおじさんたちから学ぶことであったが、実際には大学教授らが講師になることが多かった。上田さんは「井戸掘りならば地面を掘ってきた労働者が先生になれる」と思い、この井戸掘りの活動を企画した⁴⁷。

釜のおじさんたちのあの働きぶりっていうのは、あの、なんていうか、本当に尊敬に値することを目の当たりにできて、その活躍の場を作れたってことが、嬉しいことですよね。

本当にこの日本をそうやって作ってきた人たちなんですよ。私たちはその井戸っていう経験を通して、そのことを垣間見るわけだけど、本当の本当に高速道路を作り、港を作り、建物を作り、橋を作りってしてきた人たちだなんていう風に思うと、やっぱりすごいなって思いにやっぱり変わる⁴⁸。

井戸掘りの活動では、高度経済成長期に日本をつくってきたおじさんたちの経験が表現されていた。

⁴⁴ 浜田寿美男『私のなかの他者：私の成り立ちとウソ』金子書房、1998 年。

⁴⁵ 竹内、前掲書、p.96。

⁴⁶ 同上

⁴⁷ 「大阪・釜ヶ崎で井戸掘り 日雇い労働者と水の大切さ学ぶ」『産経新聞』2019 年 6 月 11 日
<https://www.sankei.com/life/news/190611/lif1906110017-n1.html>

⁴⁸ 研究会記録より

そして、参加者たちはそのようなおじさんたちの姿を見て、そのすごさを実感していた。おじさんたちが尊敬する存在に変化していったのである。参加者がおじさんのことを「釜のおっちゃん」「釜のおっさん」から「先生」と呼ぶようになるという変化も見られたという。

5-2. おじさんと参加者の関係性の変容

さらに、井戸掘りを通して、おじさんたちにも変化が見られた。あるとき、雨が降ってしまい、井戸掘りの作業ができない日があった。そこで上田さんはおじさんたちがこれまでの仕事の経験を話す場を設定した。

そしたら、参加者がですね、掘るのがうまいおじさんたちを尊敬しているわけですよ。うまいこと知っていて、そうするとですね、おじさんの口から仕事の話が出るわ出るわ。その、釜芸の場でもそれはしてくれてたんですけど、その細部であるとか、自分の気持ちのことだとか、そういうのもう、乗せて話してくれてたんですね。それはやっぱり、みんなと一緒に作業をして、すごい掘り方教えたくなったっていう思いで見つめているからだと思うんですね⁴⁹。

おじさんたちは過去の仕事の話を、気持ちを乗せて話してくれたのである。その様子はこれまで釜芸で話したときのものとは、全く異なるものであった。作業を通しておじさんの記憶や物語が、参加者の内に立ち現れ、おじさんたちを心から尊敬するようになる。そして、その気持ちがおじさんたちにも伝わることで、お互いを承認し合うことができていく様子が見て取れる。自分自身の中におじさんが現れる（自己内他者）ということは、自分の中でおじさんを受け入れるということであり、承認しているということでもある。承認とは、相手に応答することであり、一緒に作業をすることも応答関係と捉えれば、井戸掘りの活動を通して、ケア関係が生成したと考えられる。

5-3. 井戸掘りの楽しさ

井戸掘りの活動はトラブルなしに進んだわけではなかった。時には地面が崩落するようなこともあったという。しかし、そのような「事件」「危険」を参加者は楽しんでいった。

プロジェクトXみたいなことになって、崩落するとか、一人の人間を滑車で最初上げてたんですけど、大人の人上げようと思ったら後ろで五人ぐらい綱引きみたいなことしないといけなくて、もう笑うしかないじゃないですか⁵⁰。

⁴⁹ 研究会記録より

⁵⁰ 同上

作業中の崩落という「事件」「危険」をなぜ面白がることができたのか。前提としてこの活動は、釜芸のアート・表現活動の取り組みの一つである。仕事の現場では効率良く作業を進めなければならず、想定外の「事件」を楽しんでいる余裕などない。しかし、釜芸の井戸掘りはアート・表現という一種の「遊び」であるため、楽しむことができる。

普通工事現場っていうのは、か弱い人とか力のない人とか子どもとか女とかは入れないじゃないですか。そういうところに釜芸って講座なんで、誰でも入れるってようにしてて、それを先生として釜のおじさんたちがいてくれるんですけど、講座であるっていう理解をしてくれてたので、みんなに「今日やってみたい人は何人いるの」とか、「穴入ってみたい人何人いるの」とか、力ない人であつたら、「じゃあ二人でやろうね」とか、そういう配慮もおじさんたちもしてくれたから。「今写真撮るところやで」とか言ってくれるし、非常に和気藹々とですね、やれたのもよかった⁵¹。

効率性が求められる力仕事として見ると、子どもや女性は参加しにくいですが、この活動は講座であり、おじさんたちを先生として進めることで、みんなが楽しむことができる場をつくることができていた。安心して自由に活動を創り表現し合って良いというコルム、釜芸の「場」の思想に支えられているのである。

また、その過程を面白がることができるのは、協力しあう楽しさを実感できたことが大きかったという。

みんなと協力し合うのは、やっぱり面白いんですね。みんなも応援するし、危ないんで声かけあわないと、危ない。物落ちてくるかもしれないし。なので、すごい声かけあったりすることもある、よかったです。なんか自分自身、未だに腕が痛くて。私井戸掘りのためにちょっとなんか筋肉痛めたらしくて。それぐらい本気やったんですけど。掘るのは本当に面白かったですね⁵²。

この場面では、ただ井戸掘りの活動に居合わせた参加者同士が自然と声を掛け合うような関係性になっている。では、なぜそのようなことができるようになったのか。

そんなみんなで。私一回入ってあげてもらった時に、井戸から上がったら、五人ぐらいいるんだけど、外国の人が二、三人いて、なんか見知らぬ人とかもいて、上げてくれてんの。「わあ」みたいなんとか。だからそういう意味では、そんなに言葉いらなくて、外国語の人であっても、一緒に引っ張るんやなとか、そんな分かるから一緒にできたのもよかったし、みんなで力を合わせる⁵³。

⁵¹ 研究会記録より

⁵² 同上

⁵³ 同上

ここでは、身体が同期していくような現象が起こっていることが読み取れる。二人から、三人、四人と知らず知らずのうちに、協力する人たちが増えていくように、身体が同じような動きをしてしまう現象が起きている。自然と身体が動く、つい本気になっている、いつの間にか応援しているというように、そこでは言葉を必要とせず、なんだか楽しい・面白いと感じる時間と空間を共有している。井戸掘りは危険や先行きの見えない不安もあるからこそ、助け合わざるをえない状況が生まれる。その危険や不安を楽しみながら乗り越える過程で参加者同士の認識の転換、関係性の変容が起きていると考える。

このように井戸掘りの楽しさは、自由な表現が認められるという安心感と必ずしも言葉を必要としない身体同期によって生じていた。

5-4. 井戸掘りを通した上田さんの変化

最後に井戸掘りの活動を通して上田さんにどのような変化があったのかを考察する。上田さんは以下のように話していた。

本当に困難なことが起こるんですよ。いきなり地面落ちるんですからね。朝起きたら地面落ちてたってことがあって、何mか。もう、どうですかねって。本当に。誰も落ちなくてよかったって感じですけど。そういう、なんか、想像したこともないことに直面していくわけですから、それを一個一個乗り越えていくんですよ。まあ私が乗り越えられるわけじゃなくて、その現場監督とか、スタッフのみんなとかが工夫してですね、持ってる知恵と技術でですね、やってくれるんですけど、まああの、一応私代表だからね、基本、決断はしなきゃいけないですよ。彼らの提案があって、ああそうしようとか、こうしようとか。いくつの案も出るんですよ、実際問題。でもこれを選びましょうっていうのは私、決断しなきゃいけない、そういうことをしながら、本当にやり遂げていくっていうのは、まあ、別にやればできるんだっていう言葉じゃないんだけど、やれるんやっていう逞しさですね。それは自分の中に生まれたな。井戸も掘ったしな、みたいな。そういう感じかな⁵⁴。

井戸掘りを通して、上田さんには「逞しさ」が生まれた。想定外のこと、危険なこと、決断に迫られることが起きても、協力し合えば何とか乗り越えられるという自信を持つことができるようになったのである。コッルームという自由な表現の場を意識的につくっている上田さん自身も、おじさんや参加者との協働の経験を通して変容している、すなわちケアされていると言えるのではないだろうか。

⁵⁴ 研究会記録より

5-5. 小括：井戸掘りがもたらしたもの

本章では、井戸掘りに焦点を当て、協働活動を通じたケア関係の生成、経験・物語の共有交換の過程がどのように生じているのかを考察してきた。釜芸の井戸掘りの取り組みにおいて、上記の 5-1 から 5-4 の現象は全て同時に起きており、連続的なものである。また、井戸掘りは非日常的な空間と時間を生み出していると考えられる。なぜなら、蛇口をひねれば水が出る現代において、井戸を掘るという活動は極めて非日常的な活動であるからだ。しかし、おじさんたちにとっては日常、すなわち、おじさんたちの過去の仕事の空間が生まれる。つまり、井戸掘りは、おじさんたちの日常・参加者の非日常的空間が重なり合っている場なのではないだろうか。そして、この非日常空間では、助け合うことでしか乗り越えられないという状況が生まれてくるため、自然と協力し合う関係が生まれてくる。その過程では、過去に日本を支えてきたおじさんたちの姿が、参加者の内に立ち現れてくる。こうして信頼が生まれ、お互いの人間存在を承認し合う関係になっていく。この空間が側にいることで相手に応答するという現前性、すなわち「ともに在る」関係を可能にしていると考えられる。ではなぜ井戸掘りでこのような相手の経験を尊敬し、承認し合うような場・関係性が生まれたのか。それは上田さんの場づくりが前提としてあるが、それだけではなく、おじさんたちや参加者の協働があったからであり、井戸掘りによっておじさんたちの歴史的物語がそこに浮かび上がったからである。そこでは、おじさんたちの物語が、参加者（広く捉えるとその場を共有する人たち）との間で共有される。参加者は、それに対して現前性で応える。上田さんは「いのちと表現」を地続きに捉えており、井戸掘りという表現活動では、命の次元の存在をシェア、すなわち、承認していると言えるであろう。

以上より、上田さんとおじさんたちと参加者たちは非日常空間の協働活動において、楽しみながら危険や不安を乗り越えることで、「ともに在る」ケア関係・場を生み出すことができたのである。

6. まとめにかえて

本稿では、協働活動を通して「ともに在る」ことができる相互承認的な関係性を生成する方法を社会教育的ケアと指定し、コッルームの実践事例に即してその方法を明らかにすることを試みた。事例の考察では、ケア関係を生成する場づくり意識、対話に限らない日常の活動における関係性の変容について検討してきた。

本稿で明らかになった社会教育的ケアの方法を以下の三点として記す。

一つ目は、意図的に「ただそばにいる」という立ち方である。上田さんはその人のありのままの表現を受け止めるために、自分にこだわらず、自らをひらきながら、「ただそばにいる」という姿勢で立ち会っていた。この上田さんの意識が、安心して自由な参加・表現ができるコッルームという場を生成している。

二つ目は、非日常性である。釜芸では意図的に新たな活動や外部の人の参加を仕掛けていた。井戸掘りでは、過去に日本をつくり支えてきたおじさんたちの働きぶりが身体的にも精神的にも表現され

る。ココルームで行われた井戸掘りは、アートとしての表現活動の側面を持つ一方で、労働としての側面を持っていた。井戸掘りに参加した人の中には、過去の社会を支えてきたおじさんたちが歴史的な存在として現れ、おじさんに対する認識が尊敬へと変わっていく。これは、井戸掘りという非日常空間を媒介することによって、おじさんたちのこれまでの過去の物語が参加者に共有されるからである。換言すると、活動の中でおじさんたちの日常が再現され、物語が贈与されるのである。すなわち、活動を通して物語の贈与、経験の共有・交換が連続的に行われていく。

三つ目は、楽しめること・面白がれることである。ココルームでは「想定外」の状況をスタッフ・参加者とも面白がっていた。井戸掘りにおいても、危険や不安な状況を自然と身体を同期させて、他者の経験を尊敬したり、声掛けが生まれたりする中で、乗り越えていった。現代社会において、活動には、目的手段の合理性が入ってくるため、効率性が重視される。たとえ、営利目的でなくても、活動をする際には必然的に効率性が必要とされ、ある種の合理性は生まれる。その合理性がある一定の度合いを超えてしまうと、「ただそばにいること」は難しくなる。ココルームにおいては、上田さんの立ち方に加えて、非日常的な協働の表現活動の側面が面白がることのできる余裕を担保している。

これら三つの仕掛け・方法を含む協働活動を通して、ココルームでは相互承認的なケア関係が生成され、ケアの思想が埋め込まれた場が生まれていた。想定外の事態、困難な事態に対しても、協働で楽しみながらコンフリクトを乗り越えていく過程を経て、他者を信頼することができるようになる。それが異質な他者との相互承認になる。

ここで、ココルームの井戸掘りを「ともに在る」「ただそばにいる」という関係性を追求した実践と捉えてみる。井戸掘りでは、おじさんたちの日常が再現されているが、それは過去に日雇いでこきを使われていた日常とは異なる日常である。表現活動としての井戸掘りでおじさんたちの経験は、他者を支え、誇りになる経験として表現される。しかし、そのような非日常的な場での意味づけは、日常生活の中での合理的な意味づけとの間で、対立し矛盾を生じさせることもあろう。この矛盾を解決していく協働の過程で活動の意味が問い直されるのだが、その協働の過程において「ただそばにいる」というケアが生成され、おじさんたちの存在はケアによって支えられている。換言すると、活動が「ただそばにいる」・「ともに在る」というケアに支えられることによって、矛盾と向き合うことが可能となり、活動の意味を問い直す契機となる。ケアの思想が埋め込まれた協働は、従来の二者のケアの関係性を超え、私が皆を支え、皆によって私が支えられているというコミュニティ自体がケアによって支えられたものである。この支え合いの場が、合理的に意味づけされた活動によって疎外された自己を回復し、さらに、活動の意味も拡大する。つまり、コミュニティ自体の人間形成力は、ケアに支えられたものであり、協働の過程で矛盾を乗り越える経験を通して、活動の意味が深められることによってケアのコミュニティが再生産される。したがって、ココルームでは、協働の展開過程においてケアに支えられたコミュニティが再生産されていると言えるであろう。

しかし、非日常空間がケア関係を生成する条件になるかどうかは、もう少し吟味する必要がある。なぜなら、非日常空間が、必ずしも協働を生み出すわけではないからである。非日常空間の性質やそのような場が生成する条件については、今後の課題とする。ケアが失われてしまった日常の中に、多様なケア的な関係を生み出していくための条件をこれからも探求し続けていく必要がある。